夢で見た物語

中沢　央

幕が上がる。

舞台に立っているとき、マリーダは何者にでもなれる。

今日は、身分違いの愛に悩む王女だ。

ある日、王女は変装をして城下町へ行く。そこで、平民の青年と出会い、惹かれ合っていく。

「私のことはお忘れになって！」

王女は青年に別れを告げる。

別れを告げられた端正な顔の男は、苦し気に自身の胸を押さえた。

「ああ、エリザベータ。私は、全てを犠牲にして君と共に生きたい」

世の女性が虜になるような、朗々とした美しい低音の声だ。

脚本通りの、愛の言葉を紡ぐのは、新進気鋭の俳優アンデリートだ。二十五になる彼が、劇団に加入したのは一年と少し前。加入して早々、主演俳優の座を獲ってしまう才能が、彼にはあった。

マリーダには夫がいる。この劇団の専属作家で、マリーダは自分の身を犠牲にし、主演女優の座を手に入れた。

好きでもない男に身を捧げて主演の座を獲得した自分と、才能だけで主演の座を手に入れたアンデリート。

アンデリートを見ていると、マリーダは、自分が惨めに感じるのだった。

劇が終わると、劇団の女優、マリーダに戻ってしまう。

マリーダは劇が終わる瞬間が、嫌いだった。

マリーダは衣装を脱ぐと、質素なワンピースに腕を通した。――華やかなのは舞台の上だけ。

舞台の上でどれほど身分の高い令嬢になろうとも、恋に身を焦がす女性になろうとも、現実の自分は、劇団の女優でしかない。

更衣室から出ると、アンデリートと出くわした。

アンデリートも、身軽なシャツ一枚になっている。華美な服は身に着けていないのに、美しい顔のおかげで、彼には人を引き付けるような魅力がある。

アンデリートはマリーダの姿を認めると、微笑した。

「お疲れ様」

マリーダは表情を変えずに言った。

「お疲れ様」

「今日は、なかなかの人入りだったじゃないか？」

「そうね」

その時、道具係のタリアが口を挟んだ。

「今日はお祭りだからじゃない？」

マリーダは肩をぴくりと震わせた。

「お祭り？」

「ほら、今日は十七日じゃん」

タリアの言葉で、マリーダも思い出した。白露の月十七日は、作物豊穣に感謝するカーニバルが開かれる。
元々は農村だけで行われていた行事だが、月日が経つにつれ、他の階級にも広まり、今では国中で行われる祭りとなった。中でもここ、ドルチェグスでは大規模な祭りが開かれる。
「僕も今朝、祭りのこと思い出したよ。今日は観光客も多かっただろうね」
「そうだね。特にディオネ広場の方は凄いたくさんの人がいるそうよ」
「タリアはカーニバル見に行かないの？」
マリーダの問いにタリアは肩をすくめた。
「私人混み苦手なんだよね。それに地元だから見飽きてるし」
そう言うとタリアは、道具の片付けに戻っていった。
実を言うと、マリーダはカーニバルに興味がないわけではない。いつも以上に露店も賑わっているし、往来の人々は皆、音楽に乗りながら疲れるまで踊りに明け暮れる。もう終わってしまったかもしれないが、音楽隊や仮装をした人々のパレードもあって、とにかく町一帯が活気に溢れるのだ。
マリーダの様子に気づいてか、アンデリートは軽い口調で言った。
「どうだろう、少し見に行ってみないかい？」
「あなたと？」
マリーダは目を丸くした。
「セルビオやニールセンと行ったら？」
セルビオとニールセンは、共に劇団の俳優だ。
「でも、君はカーニバルに興味がありそうじゃないか。興味がある人と行った方が、楽しいだろう」
夫の顔が胸をかすめた。
アンデリートと二人きりでどこかへ出かけたことはない。そもそも、マリーダは結婚してから、男と二人きりで外に出たことが無かった。
「それとも、ジョナディオと行く予定だったかな？」
別に夫とはカーニバルの話をしていない。先ほどまでカーニバルの存在を忘れていたぐらいだ。
「いいえ。そんな予定はないわ」
マリーダには、アンデリートの誘いが魅力的なものに思えた。
はっきりと、夫以外の男性とは遊びに行かない、と言えば、アンデリートも引き下がることは分かっている。しかし、アンデリートの誘いを断るのは嫌だった。
マリーダは自身の服に視線を落とした。
「でも、服が……」
今日は質素なワンピースしか持ってきていない。
「僕もだよ」
アンデリートはいたずらっ子のように、ニヤリと笑っ

た。
「衣装でも着ていこうか」
「まあ」
マリーダは、そこで初めて笑った。
「冗談だよ。周りは仮装した人もたくさんいるだろうから、浮きはしないだろうけど」
アンデリートは歯を見せて笑った。マリーダの心臓が、微かに脈打った。
「恰好なんてどうでもいいじゃないか。楽しめればさ」

ディオネ広場は劇場から歩いて行ける距離にある。
マリーダたちが着いたころには、日も沈み始めていたが、大勢の人で賑わっていた。
豪華な服を着た者、繋ぎのついた服を着た者、貧富に関係なく皆、近くの人と楽し気に肩を組み、手を取り合って踊っている。
アンデリートは右手をマリーダに差し出した。
「僕と踊ってくれるかい？」
これほど美しい人に誘われたら、どんな女性も、目の前にある右手を取ってしまうだろう。
マリーダも右手を差し出した。
「ええ」
アンデリートはマリーダの手を引き寄せた。
アンデリートの顔がよく見える。
形の良い眉、通った鼻筋に、男にしては長い睫毛。
今までたくさん劇で、間近で顔を見ていたはずなのに、今更ながらアンデリートに見惚れていた。
アンデリートが動き出すと、マリーダの意識は踊りに向いた。
踊りの型は決められておらず、皆好きなように踊っている。
アンデリートは軽快な足取りでステップを取りだした。相手がリードしてくれるおかげで、マリーダはのびのびと踊ることができた。
マリーダたちのそばにいる若者が、肩を組みながら、ただ飛び跳ねているだけに見えるような動きをしている。
アンデリートも若者たちの動きに気づくと、マリーダの両手を握って、円を描くようにぐるぐると回りだした。
思わずマリーダも声を出して笑った。もう型も何も関係ないような踊りだ。
足が疲れてくると、マリーダは叫んだ。
「休憩しましょう！」
マリーダは息を切らしながら少女のように笑った。
美男子と踊ったせいか心なしか気分が高揚している。
「楽しかったわ！」
「僕も！　相手が良かったからだな」
マリーダはクスクスと笑った。
「あら、そんな調子のいいことを言って。今まで、たく

さん女の子たちを泣かしてきたんでしょうね」
アンデリートは肩をすくめた。
「ご想像にお任せします」
アンデリートは微笑んだ。舞台の上のように着飾っていない、純粋な笑みだった。
「でも、相手が良かったっていうのは本心だよ」
マリーダの胸が高鳴った。
「相手が上手だと、こっちも楽しいからね」
――なんだ、踊りのことか。
アンデリートの言葉にがっかりしていることに、マリーダは驚いた。
「最後はでたらめな踊りになっちゃったけどね。あなたも上手かったわ」
マリーダは自分の胸中に目を向けぬよう、明るく言った。
「踊りはどこで習ったの？」
「いや、習ったことはないよ。ただ、何度か旅芸人や祭りの踊りを見たことがあるからね。――だから少しは形になっているんじゃないのかな」
アンデリートは自身の腹に手を当てた。
「お腹空いたな。何か食べていかないかい？」
マリーダは咄嗟に答えられなかった。
夫以外の男性と二人きりで食事をするのは、褒められることではないと思う。
しかし、もっとアンデリートと二人きりでいたいと思ってしまった。
「せっかくだから食べていきましょう」
マリーダの口から言葉が飛び出していた。

今日も幕が上がる。
昨夜は楽しかった。あっという間に時間が過ぎ去っていった。
マリーダは、お気に入りの口紅を取り出した。
高かったけれど、どうしても欲しくて、買ってしまったものだ。もったいなくて、滅多なことではつけない。指で紅をつけていると、ふと、ジョナディオと初めてデートした時にも、この口紅をつけたことを思い出した。
マリーダは口紅の蓋を閉めた。
自分の胸の奥底にある想いに気づいてはいけない。
これは、舞台に真剣に臨みたいからこその行動だ。
自分は夫いる身だ。特別な感情を抱いてしまったら、自分だけでなく他の人も不幸になるのが目に見えている。
マリーダは鏡の中の美しい王女に微笑んだ。
大丈夫。演技をするのは慣れている。自分の気持ちを押し殺すくらい造作もないことだ。
ナターレが舞台袖から客席を見て、感心したように呟

いた。
「今日も女性客が多いわね」
アンデリートが劇団に加入してからというもの、女性の客が増えた。
マリーダがそう感じているだけでなく、他の劇団員たちも口を揃えて言うものだから、事実だろう。
彼の美しい顔と声は、多くの女性を魅了する。
貴族の娘の中には、アンデリートに夢中になり、こっそり劇を見に来ている者もいる。
ナターレは、周囲の人々よりも華美な服を身に纏った若い娘を顎で示した。
「あのご令嬢、アンデリートに首ったけね。今日も来てる」
あの貴族の娘のことはマリーダも知っている。御付きの家来を従え、度々劇を見に来ている。
貴族の娘は、劇が終わると、決まって主演俳優の楽屋を訪れた。おそらく、今夜もアンデリートの楽屋を訪れるのだろう。
本番直前だというのに、そのことが頭にちらついて離れなくなった。
ふと、ナターレは寂しそうな顔をした。
「――私だったら、見に来れないだろうな」
「え？」
「だって、好きな男が他の女を抱きしめ、愛してるって言うのよ。耐えられないわ」
マリーダは苦笑した。
「でも、演技よ」
「演技でも、よ。お芝居だって分かっていても、嫌じゃない」
「だけど、あの人は、その後アンデリートから愛されるのでしょう」
呟いた声が、自分でも驚くほど乾いていた。
ナターレはマリーダの様子を訝しむことなく、声を潜めた。
「噂だけどさ、アンデリートは、あのご令嬢に手を出していないそうよ。毎回すぐに帰してるみたい」
マリーダは眉根を寄せた。
貴族の好意を無碍にすることはできない。自分を気に入ってくれた貴族がパトロンになり、自分だけでなく劇団に寄付をしてくれることもあるのだ。
「そんな貴族の機嫌を損ねるようなこと」
逆に有力者の怒りを買えば、自分だけでなく劇団全体に報復されることもある。
「言い方悪いけどさ、確かリリアナ様はまだ十代でしょう。適当にあしらわれても、後で少し甘い言葉を囁けば、許してしまうんじゃないかしら」
マリーダは何と言えば良いか分からず、黙っていた。
今までアンデリートに夢中になる女性に露ほどの興味も

なかったのに、何故か、客席に座っているリリアナのことが気になった。
「おいおい、皆が皆アンデリート目当てだと思うなよ」
口を挟んできたのは、セルビオだ。アンデリートが来る前は、彼が主役の座に収まっていた。
ナターレは呆れたようにため息をついた。
「あら、よく言うわ」
「おいおい、俺もけっこうモテるんだぜ。この前も出待ちしていた女の子と……」
「そういうことを自慢げに話している時点で、アンデリートには負けているわよ」
アンデリートも女性と一夜限りの関係を持つことは何度かあったが、そのことを特段ひけらかすことも、隠すこともしなかった。アンデリートが何も言わずとも、他の劇団員たちも、そのことは気づいていたし、咎める者もいなかった。
「それに彼には、才能もあるわ」
ナターレは意外そうに、マリーダを見た。
「意外ね。私、あなたはアンデリートのこと認めていないと思っていたわ」
「あら、何故？」
ナターレは肩をすくめた。
「あなた、彼が主演に選ばれた時、悔しそうな顔してたんだもの」
マリーダは口をつぐんだ。それは、劇団に加入して早々に主演の座をとってしまった彼の才能に嫉妬したからだ。
アンデリートが主役の座を取っているのは、彼の恵まれた容姿だけが理由ではない。
「僕は、ある動作を一回見ただけで覚えられるんだ。頭の中にこびり付いたように一連の動きが離れない」
彼は、一目見た動きを、すぐに覚えてしまうらしい。
それは、彼の天賦の才能だろう。
「さあ、立ち話はこれくらいにして。二人とも、そろそろ本番よ」
ナターレはそう言うと、倉庫へ走っていった。

青年と王女は、一緒に街を探索するうちに、愛を育んでいく。
互いの気持ちが分かった時、王女は自分の正体を明かす。
真実を告げられた青年は、悩ましげに顔をゆがめる。
「どんな困難が待っていても、僕は君を手に入れたい」
アンデリートが愛の言葉を紡ぐたび、マリーダの心臓は高鳴る。
これは演技だ。彼は脚本の台詞を言っているだけにすぎない。
二人は、家臣たちを振り切り、命がけで逃げようとした。しかし、国民の姿を見ているうちに、王女は城に戻

る決心をする。
青年は、愛しい女性を強く掻き抱いた。
息遣い、表情。言葉はなくとも、アンデリートは全身で哀しみを表現している。この劇を見ている多くの観客が、感嘆の息を洩らしているのが、空気で分かった。この若い主演俳優は、端正な顔ではなく演技で観客を魅了していた。
アンデリートの息が、瞼に触れる。
堰が切ったように、体の芯から、身を震わせるような感情が噴き出した。ずっと、こうして彼の腕の中にいたい。心臓が、痛いほど脈打っていて苦しい。
「――好きよ」
アンデリートの身体が、微かに震えた。
アンデリートの腕を緩める動きがぎこちないことに違和感を覚えて、マリーダは視線を上げた。
アンデリートの表情を見て、マリーダは自分がとんでもないことを口走ったことを悟った。
脚本には無い言葉だ。ジョナディオは、敢えて、恋人たちが最後の抱擁を交わすこの場面に台詞を入れなかった。
「口に出せばいいってもんじゃない。言葉よりも、観客を感動させる方法はあるんだ。お前たちの演技なら、観客を魅了させることができるはずだ」
稽古中、皆の前で脚本家はそう言った。
頭が真っ白になって、もう何の言葉も浮かんでこない。冷汗が噴き出してくる。
独り言のようなものだから観客や他の劇団員に聞かれた可能性は低いが、アンデリートには確実に聞こえている。
しかし、アンデリートが表情を崩したのは一瞬だった。彼は、顔をマリーダに近づけた。脚本にはない動きだ。
マリーダも後で知ったことだが、その時のアンデリートの表情は、まるで、本当に愛する人と今生の別れをする者のように慈しみと哀しさを秘めていたという。
耳元で心地よい声がした。
「――落ち着いて」
その瞬間、あたりの景色が戻ってきた。
マリーダは次の自分の動きを思い出した。
王女は涙を流しながらも愛する男を一度も振り返らず、城へ駆け出して行った。
何とか最後まで劇を続けられたが、マリーダは一刻も早く劇場から離れたかった。
幕が下りるや否や、マリーダは楽屋へ走った。
「マリーダ？」
マリーダは、怪訝そうな夫の声に振り返りもしなかった。
今日は早々に帰ろう。

マリーダは急いで着替え、髪留めを外すと荷物を手にして廊下に出た。
裏口に向かう途中、見覚えのある若い娘の顔を見て、マリーダは足を止めた。
リリアナの頬が微かに紅潮している。
マリーダが着替えを終え、身支度を整えている間しか部屋にいなかったのだから、何も起きていないのだろうが、幸せそうな娘の顔を見て思いがけないほど感情が波立った。
ためらいもせず恋心を抱けるリリアナに嫉妬していることに、マリーダは気づいていた。
すぐにでも帰ろうと思っていたのに、マリーダの足は主演俳優の楽屋へ向いた。
今の自分の行動に驚きためらいながらも、マリーダは扉を叩いた。
「どうぞ」
部屋に入ってきたのがマリーダだと分かると、アンデリートは、描いたような形の良い眉を上げた。
部屋の窓が開いているのは、換気のためじゃないだろう。
「あの方を愛してあげないの？」
アンデリートは不満そうにため息をついた。おそらく、何度か同じようなことを他人から言われているのだろう。
「嫁入り前の貴族のお嬢様を、傷物にはできないだろ」
「それもそうね。身分差のある恋は不幸になるだけよ」
二人とも、先ほど自分たちが主演を務めた物語を思い出していた。
「あの人だって、いずれ相応しい家柄のお貴族様と結婚するんだ。何もしないのが、あの人のためだし、僕は男娼じゃない」
アンデリートの顔に、苦々しい表情が浮かんでいる。
「……座長から何か言われたの？」
「まあね。……確かに、お貴族様や金持ちには媚びを売っておいた方が良いさ。でも、僕は役者なんだ。役者は演技をしていれば良いじゃないか」
マリーダは戸惑いながら、声を絞り出した。
「でも、パトロンたちから多額の寄付をしてもらえるから、うちの劇団は、この劇場と契約を更新できるのよ」
「じゃあ、君は僕が貴族だったら、寄付の引き換えに僕に身を委ねるのかい？」
マリーダの顔が、さっと赤く染まった。
とても恥ずかしくて、アンデリートの顔を見ることができない。
「――できないわ」
言いながら、マリーダは自分の答えに疑問を抱いていた。
マリーダの表情を見て、アンデリートは自身の失言を悔やんだのか、申し訳なさそうに視線を落とした。

「ごめん。ご婦人に言う言葉じゃなかった」
二人が口を閉ざすと、往来を行く人々の声が聞こえてきた。仕事終わりの職人が帰路に就き、夫人が夕飯の材料を買いに行く時間だろう。
アンデリートは窓を閉めた。
「君でも台詞を間違えるんだな」
マリーダは肩を震わせた。
何を言っても、正解ではない気がして、マリーダは黙っていた。
「マリーダ」
動揺しているため、マリーダはアンデリートが近づいてきていることに気づかなかった。
「どんな困難が待っていても、僕は君を手に入れたい」
頭の中では、それが劇の台詞だと分かっていた。
マリーダはアンデリートの顔を見上げた。自分は今、どんな表情をしているのだろう。
「こんな時でも劇の練習？」
アンデリートは微笑した。翳りのある寂しい笑みだった。
「さあ、帰り給え。お互い疲れているようだし、早く帰ろうじゃないか」
アンデリートはマリーダが答えるより先に、ドアを開けた。

ジョナディオは家に着くと、心配そうに声をかけてきた。
「どうした？　劇が終わった後様子が変だったが」
「――ちょっと体調が悪くて」
「そうか。明日は『夢で見た物語』の最終公演だからな、ゆっくり休め」
「夢で見た物語」はその名の通り、ジョナディオが夢で見た物語をもとに作られた。
ジョナディオは椅子に腰かけた。
「今日の演技はとりわけ良かったな」
「あら、ありがとう」
「特に、最期の逢瀬の場面は素晴らしい演技だったよ。――俳優の方もな」
マリーダは、胸がざわつくのを感じていた。
「そうね。彼は、素晴らしい才能の持ち主だから」
「ああ。アイツは見てくれも良いが、演技力も劇団一だろう」
マリーダは、自分が主演女優に選ばれた時のことを思い出していた。
初めて主演の座に輝いた時、マリーダはジョナディオの妻になっていた。
前任の主演女優は、人気のない所にマリーダを呼び出した。
「どう？　自分の身を売って主演に輝いた気分は？」

あの時の女優の顔を思い出すと、暗い感情が重く胸にのしかかる。彼女は、悔しさと侮蔑の表情を浮かべ、マリーダを嘲笑っていた。
夫はマリーダより六つ年上の三十歳。ジョナディオの少し神経質そうな顔を見ながら、マリーダは口を開いた。
「ねえ、何故私と結婚したの？」
ジョナディオは驚いたように、マリーダの顔を見た。
「どうした？　誰かに何か言われたのか」
「いいえ。……私は実力で主演になった訳じゃないから」
ジョナディオは微笑んだ。
「何を言うんだ。お前が主演になったのは、私の妻だからではないよ。エレニアが主演から外れたのは、自分の身から出た錆のようなものだ。アイツの傲慢さには他の劇団員も辟易していたからな」
マリーダはジョナディオの顔を、そっと見つめた。ジョナディオは、前任の主演女優よりマリーダの演技の方が優れている、とは言っていないことに気づいているだろうか。
「今日は早く寝ろ。食事は私が作ろう」

最終日も観客席は、多くの人で埋まった。
今日の公演は、台詞を間違えなかった。
「これから食事に行かないかい？　ほら、カーニバルの時、西大通りに新しい料亭ができたって話しただろ」
「良いわよ」
アンデリートの提案に、マリーダは二つ返事で承諾した。
私服に着替え終え、いそいそと劇場を後にしようとする二人の姿を見て、少年が首をかしげた。
「二人ともどこか行くの？」
ティムスの両親は、劇団の道具係と女優をしている。
「西大通りに新しく店ができたんだよ。そこに行こうって話していたんだ」
アンデリートは正直に答えた。
ティムスはマリーダの袖を引っ張って駄々をこねた。
「いいなー！　僕も連れてって！」
マリーダとアンデリートは顔を見合わせた。
アンデリートは苦笑した。
「良いよ」
「やったー！」
マリーダは思わず笑みがこぼれた。ティムスの子供らしい、純粋な喜び方が微笑ましかった。
アンデリートと二人きりになれないことを口惜しく思っている自分の感情には気づかないふりをした。

すれ違う人々からは自分たちが、どのように見えているのだろう。子連れの若い夫婦に見えているだろうか。

それなら嬉しいのに。
「今日で公演が終わったわね」
マリーダの言葉に、ティムスが振り返った。
「二人とも、すっごく格好よかったよ！　僕もいつか二人みたいな役者になれるかなあ」
アンデリートは微笑んだ。ティムスの子供特有の愛らしい言葉が、嬉しいのだろう。
「なれるさ。ティムスは何度も劇を見ているし、お前のお母さんは立派な女優だろう」
「うん！」
母親を褒められてティムスは笑みを深くした。
「お話は少し難しかったけどね。二人は両想いだったんでしょ？　何でエリザベータはお城に帰っちゃったのかな。ジョナディオが書く話って難しいのが多いよね」
「いつか、ティムスが大きくなったら、もう一度『夢で見た物語』を見てみて。きっと、その時にはエリザベータの気持ちが分かるんじゃないかしら」
「そうなのかな」
ティムスはまだ難しそうな顔をしている。
「大人になると、大切なものが増えていくんだよ。――相手のことが好きだからって、何でもしていい訳じゃないんだ。好きになった人と身分が違ったり、家庭を持っていたり……。二人の気持ちだけじゃ、どうにもならないことがあって、他の人や大切なものを犠牲にしたくなくて、諦めなきゃいけない時があるんだ」
マリーダはハッとしてアンデリートの横顔を見た。まるで自分自身に言い聞かせるような口調だった。
これは、自分とマリーダに対して向けた言葉なのだ。
「そうね。物語の中のように、三日間で終わりにしておいた方が良い恋もあるわ」
思わず声が震えてしまったが、マリーダはアンデリートと顔を見合わせて、頷いた。
自分たちは、今日で終わりだ。明日からは、互いに胸の中にある気持ちを消さなければならない。本当は泣き出してしまいたいほど悲しいが、それが自分たちにとって最善の選択なのだ。アンデリートは微笑んでいたが、何かを失ったような憂いを帯びた目をしていた。
ティムスは口を尖らせて首をかしげた。
「二人の話も難しいよ」
「そうね。難しい話はこれくらいにして、早くお夕飯を食べましょう」
マリーダは、劇場へ足を踏み出す度、刻々と終わりの時が近づいているのを感じていた。
可能なら永遠にここにいて、ずっとアンデリートと一緒にいたい。
「美味しかったね！」
マリーダは、ティムスの言葉に相槌が打てなかった。

味なんて感じる余裕もなかったし、色んな感情が体中を駆け巡っていて食欲もなかった。
「――ティムス、果実飴を買ってあげるよ」
「え、良いの！？」
ティムスにお菓子を買ってあげるよう言った時のアンデリートの胸中が分かるような気がして、マリーダの胸の中に温かいものが広がった。
果実飴を片手にティムスが戻ってきた時、背後からかけられた声が、マリーダたちの笑みを消した。
「二人で何をしているんだ？」
比喩ではなく本当に、心臓が跳ね上がった気がした。聞き慣れているのに、今、世界で最も聞きたくなかった声だ。
マリーダは恐る恐る振り返った。
表情の無い、夫のジョナディオが立っていた。
「あ、ジョナディオ！」
大人の胸中など露ほども知らないティムスは、楽しそうにジョナディオに声をかけた。
ジョナディオはティムスには目もくれず、暗い目をマリーダとアンデリートに向けていた。
「二人で楽しそうだな」
「あなた、違うの」
ジョナディオは、マリーダの言葉に耳を傾けることなく、虫けらを見るような目をアンデリートに向けた。
「夫いる女性に手を出すとは、とんだ下衆だな」
「……」
暴言を吐かれても、アンデリートは眉一つ動かさなかった。否定も謝罪もせず、ただ、静かにジョナディオを見つめていた。
この場に流れるただならぬ重い空気を感じ取ったのか、ティムスも怯えた表情を浮かべ、黙ってしまった。
ジョナディオはマリーダの腕を掴んだ。掴み方に思いやりや愛情などは微塵も感じられず、マリーダは心臓が冷え切るのを感じた。
「行くぞ」
マリーダはアンデリートを振り返った。その時、アンデリートの表情が微かに変わった。
彼は、何か言いたげな目をしている。アンデリートが何を言いたいか、マリーダには分かるような気がした。それが、たとえ、自分の都合の良い妄想だとしても、自分の推測が当たっていることを、マリーダは願っていた。
「ねえ、聞いた？」
「マリーダとアンデリートのこと？」
劇団員の噂話が聞こえてきて、マリーダは思わず足を止めた。

「信じられないわ、人のものに想いを寄せるなんて」
「ほんと。でも、意外だわ。あんな美男子が自分にご執心の貴族のご令嬢ではなくて、マリーダを選んだのが」
劇団員たちの間に嘲笑が広がる。
「マリーダなんて化粧が派手なだけの女じゃない」
「そうだな。俺的には、あのご令嬢の方が美人で金も地位もあるし、あっちの娘の方が良いね」
「まあ、どちらにしろ、アンデリートはこれで終わりだな。いい気味だ。アイツ顔だけの俳優だし」
怒りのあまり、眩暈がした。自分の悪口は何とか堪えることができる。しかし、アンデリートの悪口だけは、許せなかった。
自分とアンデリートの悪口を聞きたくない一心で、マリーダは皆の前に姿を現した。
マリーダに気づくと、皆口をつぐんだ。
「何か勘違いしているみたいだけど、彼とは何もないわ」
劇団員たちは、否定も肯定もしなかったが、疑いの目をマリーダに向けた。
「本当よ」
マリーダは努めて平静に言った。演技をするのには慣れている。
マリーダが再び口を開こうとした時、静かな低音の声が聞こえてきた。
「マリーダ」
横目でアンデリートの姿を認めると、マリーダの胸がざわめいた。
「話しかけないで」
自分でも驚くほど冷たい声が出た。
冷水を浴びせられたように、アンデリートの顔が強張った。
周りの劇団員も、驚いてマリーダを見つめている。マリーダの声には、一切の情も感じられず嫌悪感が滲み出ていた。
「――少し二人で話したい」
気圧されながらも話しかけてくるアンデリートに、マリーダは追い打ちをかけた。
「話しかけないでって言っているでしょう。気持ち悪い」
今度こそ空気が凍り付いた。
呆然と何も言葉を発しない劇団員たちの顔が見える。セルビオだけが、アンデリートをせせら笑っているのが、ありありと分かるような表情を浮かべていた。
酷い言葉を投げられたアンデリートの傷ついた顔を見て、マリーダは針で刺されたように胸が痛くなった。
周囲の視線よりも、アンデリートの顔を見ることに耐え切れず、マリーダは足早に楽屋へ向かった。
扉を閉めると、息を深く吐いた。
みるみるうちに涙が込み上げてきて、眼から溢れる。息を吸うたびに、嗚咽が漏れだした。

あんなこと言いたくなかった。彼を傷つけるようなことを言いたくなかった。彼を守りたかった。

アンデリートとの仲が終わったことよりも、想い人を傷つけた方が悲しい。

マリーダは膝をつき、服が汚れるのも気にせず床に座り込んだ。

アンデリートのことを思うと、申し訳なさで胸が締め付けられそうだ。

想い人を傷つけたことが悲しくて、マリーダは涙を流し続けた。